よろこび

日蓮宗 聞聖会

本山 妙顕寺
長音山 本要寺

『よろこび』六十（幸福とは何かの再考）

貫首　齊藤　日軌

先日前世を想起していたら、人々に道を説いている前世の自分がいたのだが、今一歩周りの人々に、真理を強く、伝えきれない弱い自分がいた。

しかし過去世で悟りの様な意識状態に入ったとき、本当の自分は、光であり永遠の命であることを実感した。

その意識は喜びを伴った安らかな愛の心でもあった。

その意識状態にあれば、もっと自信を持って真理を伝えられたのにと痛感した。

いま再び実感することは、本当の自分とは永遠に存在する喜びの意識ということ。此れが幸福の原点ではないか。存在することが、喜びである。

いや喜びが存在なのである。自己の意識があるから世界が存在している。自分の意識が喜びであれば、風もそれにそよぐ草木も、空を飛ぶ鳥やトンボもみんな笑顔である。

あなたと私、みんな手を取り合って笑顔で生きてゆきたい。

肉体の囚われから、ちょっと心を解放して笑顔の自分に戻ってみよう。きっとあなたも僕にほほえむだろう。幸福感とは本当の自分の意識感覚だったのだ。

みおしえ

「心が安住することなく、正しい真理を知らず、信念が汚されたならば、悟りの智慧は全からず。（法句経三十八中村元訳）」

「心が煩悩に汚されることなく、おもいが乱れることなく、善悪のはからいを捨てて、目ざめている人には、何も恐れることが無い。（法句経三十九中村元訳）」

この法は、仏がサーバッティーにおられたときチッタハッタ長老について説かれたのです。ある日、チッタハッタが牡牛を探し森に入り、おなかが減って精舎でごちそうになった。自分は一生懸命働いてもおなかがいつも減っている。出家するとこんな美味しいものがいつでも食べられると言って出家するがすぐ飽きて還俗する。六度めの出家のあと妻の寝みだれただらしない姿を見て無常を感じ、「自分は、何度も出家したが彼女に執着し還俗を繰り返した」と悟り、七度目の出家をして阿羅漢となった。

心が安定せず、八正道をしらず、信念が揺れ動くものは悟りの智慧をえることができない。しかしむさぼらず、煩悩に心乱されず、善悪を超えた目覚めたものには恐れがない。

心の言葉

南無妙法蓮華経と唱え
心を安定させ正法を理解し
善悪のはからいを捨て
悟りに入ろう